The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	通訳者が開始する自己・他者修復 ： 米国公聴会でのパフォーマンス的応答の優先化
Author(s)	菊池, 春花
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 34-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102270
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

通訳者が開始する自己・他者修復
米国公聴会でのパフォーマンス的応答の優先化

菊池　春花

1.　はじめに

2010 年 2 月 24 日、トヨタ自動車株式会社の社長・豊田章男氏と米国トヨタ社長の稲葉良睨氏はトヨタ車の「予期せぬ加速問題」 (Unintended Acceleration) に関して証言するため米国公聴会にて答弁を行った。予期せぬ加速問題とは、アクセルが踏まれていないにも関わらず自動車が急加速する現象を指し、2010 年 5 月の米側の報告ではこの急加速によって 89 名が死亡した可能性があると報じられ、全世界でのリコール台数は 1000 万台にのぼった。問題の原因についてトヨタ社は (1) 標準仕様ではないゴム製のフロアマットがアクセルに引っかかる可能性と (2) 踏まれたアクセルペダルが元に戻りにくい可能性を認め公聴会の場を含め各所で謝罪を行っている。さらに公聴会の時点では、アクセルの電子制御システムにも欠陥があるのではという疑惑がかけられていた。しかし 2011 年 2 月の米運輸省 NTHSA による最終調査報告では、電子制御システムに問題はなかったと結論付けられた。

公聴会について報じたメディアには豊田による謝罪を肯定的に報じたものと答弁の内容を否定的に報じ問題への対応について懐疑的な姿勢を示すものが混在していた。では、実際の公聴会の場ではどのようなやりとりを通してトヨタ社の問題に対する否定的もしくは肯定的イメージが構築されたのか。豊田の答弁を考察する上で重要な点は、豊田の答弁が通訳を介して行われたことであろう。先行研究では、通訳者は先行する発話を「そのまま」再生産する存在ではなく、イデオロギーに沿って発話の修正、追加、省略を行うことが明らかになっている (Gu, 2019)。

本稿は外国籍企業が答弁を行う公聴会の場において、通訳を介する応答を産出するやりとりから肯定的もしくは否定的意味構造が作られる過程を会話分析の視点から明らかにし、通訳者が特定の意味構造に志向する際に果たす自主的な役割を分析する。さらに企業側の話し手が通訳者の自主的な役割を発話にどのように取り入れるのか、または取り入れないかを分析することで、意味構造を産出するために通訳者に必要とされる語用論的能力の一端を明らかにすることを目指す。これにより、公聴会における外国籍企業の通訳者を介したやりとりを、発話された意味構造との関係性において具体的かつ体系的な手段で評価することに貢献することが本研究の狙いである。本稿ではまず関連する相互行為の微視的研究について概観し、当該の公聴会の背景情報を述べる。実際の公聴会場面から二事例の抜粋を分析した後、観察された通訳者の役割について議論する。

2.　通訳を介する相互行為に関する先行研究

現在まで少数ながら複数の会話分析的研究が記者会見の場における通訳者の相互行為的実践を明らかにしてきている。これらの研究は通訳者が話し手の発話を単に再生産する存在ではなく、相互行為の中で自主性を持った役割を担っていることを論じている。Liu (2023) は中国首相への外国語話者の記者による質問から開始される通訳と応答の連鎖を分析し、通訳者は記者の質問の語彙選択や文脈背景、質問の形式を変換することによって記者の敵意的な姿勢を和らげた通訳を行い、受け手にとって質問を抵抗・回避することが容易になると分析している。例として Liu

は、記者の “Taiwan this weekend will hold an election and a referendum.” という英語での質問の前置きを通訳者が北京語で “The Taiwan region will hold an election and a referendum.” (原文訳) と通訳することで台湾を中国に属する地域の一部であると暗示し、選挙の重要性を下方修正した状態で伝えていると述べている。

通訳者はより明示的に通訳以外の役割を会話の中で担うこともある。Li・Liu・Cheung (2023) は米国在台湾協会での記者会見において、米側の話し手が通訳者に言及した発話を行う場面を分析している。通訳者への言及は (1) 通訳者への感謝、(2) 通訳のために別の話し手に一度の発話量を調整するよう伝えるもの、(3) 通訳内容の確認、(4) 通訳内容の訂正、(5) 通訳者に向けた冗談、(6) 通訳者への気遣い、という形で観察された。Li・Liu・Cheung によると、通訳者はこれらの言及へ応答することによって記者会見の場で笑いを生み出したり、より正確な通訳を行うきっかけとなる相互行為的役割を果たしている。

本稿では Liu (2023) と同様に通訳者の自主的発話のうち、特に通訳者が開始する自己修復及び他者修復に着目して分析を行う。過去の会話分析的研究は、修復を通して話し手が特定の制度性に志向する様子を分析している。Okada (2013) は第二言語教師や試験管の問いや説明に対して第二言語話者から適切な応答が得られない場合には、元の行為がより容易な第二言語への定式化をもって自己修復されると示した。修復された定式化には徐々に適切な応答への暗示的な誘導が伴い、それによって教師や試験管は第二言語話者の言語能力を測ることが可能になっていると Okada (2013) は述べている。このように会話分析的研究は、参与者が修復の連鎖を通してどのような志向を提示するかを分析することによって、特定の制度的相互行為で優先化される事象を明らかにすることができる。したがって、トヨタ社が答弁を行った公聴会の場においても、通訳者が自己・他者修復を通していかに自主性を発揮しどのような優先化を行い、豊田の回答を通してどのような意味構造を産出することに志向するのかを明らかにすることで、通訳者に求められる語用論的能力の一端を明らかにできるだろう。

3. データ

本稿では 2010 年 2 月 24 日米国の下院監視・政府改革委員会によって開かれた “Toyota Gas Pedals: Is the Public At Risk?” と題された公聴会のやり取りを会話分析の手法を用いて分析する。トヨタ自動車株式会社からは当時の社長・豊田章男氏と米国トヨタ社長の稲葉良睨氏が出席し 23 名の議員からの質問に対して応答を行った。データは C-SPAN がウェブサイト上で公開している動画を用い、Jefferson (2004) の書き起こし手法を用いてやり取りを詳細に文字化した。以下では下院議員のデニス・クシニッチとジェリー・コノリーが質問を行った二場面を分析の対象とする。

4. 分析

以下は公聴会開始から約 2 時間で開始された質疑の場面である。オハイオ州下院議員のデニス・クシニッチ (抜粋では KC と表記) は質問の前置きにおいてトヨタ社が経費削減を優先し、車の安全性能を後回しにしたのではないかと批判したのち、抜粋 1.1 の質問に移っている。分析の焦点は通訳者による 57 行目の自己開始型自己修復とする。

抜粋 1.1

```
41  KC: now (.) uh: (2.4) mister=uhm (0.7) toyoda.
42     (8.0) to Y↑OUR kno:wledge, were there (.) uhm EVER
43     any discussions an-at toyota, (0.9) that certain
44     desi:gn or engineering ↓flaws, (0.7) would create
45     system failures that would result in unintended
46     acceleration.
47     (1.8)
48  通訳: え: トヨタの sh-あの車内で (0.3) え: n ある, 設計上
49      >あるいは< 技術上の,お: (0.3) まぁ (.) 欠陥が (.)
50      あると,[(.)＝
51  豊田:       [°うん°
52  通訳: ＝え:意図せ↑ざる:>アクセラレーション<[が:,
53  豊田:                                       [°うん°
54  通訳: 起こるようなかたちでシステムが故障[す↑ると:,   ]
55  豊田:                                   [°うん, うん°]
56  通訳: 事由のことに関する, 議論をなさったことは (0.3)
57        おありですか?=議論をしたということにしておきますか.
```

クシニッチは 41 行目で回答者を豊田に限定し、42 行目で “were there (.) uhm EVER any discussions an-at toyota” と質問を開始している。予期せぬ加速問題に繋がるような車の欠陥について社内で議論がなされたかを問うこの質問は、“ever” や “any” の否定極性アイテムによってその時期や規模に関わらず、何らかの議論があれば報告を求める定式化がなされている (Heritage, 2009)。しかし同時に肯定的回答を引き出すハードルを下げなければならないという点で、クシニッチはそもそも目立つ大きな議論がなかった可能性にも志向しながら質問を行っている。このクシニッチの否定的スタンスや否定極性アイテムは通訳者によってどのように扱われるのか。48 行目以降、議論についての通訳が見られるのは 56-57 行目である。“Ever” や “any” は「今まで」や「いかなる」、「どんなものでも」などと通訳され得るだろう。しかし 56 行目の質問は「議論をなさったことは (0.3) おありですか?」と定式化され、クシニッチの否定的スタンスを受け継がずに肯定的な応答を期待する定式化をもって通訳されている。しかしこの肯定的に定式化された質問は最終的な質問の選択肢とはならず、通訳者は間を置かずに「議論をしたということにしておきますか.」と質問を自己修復している。このような質問の通訳と自己修復を通して、通訳者が二つの優先化を行っていることが分かる。まず「議論をしたこと」は「しなかったこと」よりも、さらに「議論をしたということにする」ことは「議論をしたことがある」よりも豊田への質問として優先されるということである。

しかしこの通訳を通した質問を受けた豊田は直接的回答を避けたため、クシニッチは豊田に適切な応答を求め、再度同じ質問を繰り返している。抜粋 1.2 はクシニッチによる質問の繰り返しと、通訳者による同時通訳の場面である。

抜粋 1.2

```
87   KC:   were there e- [were there any-] (0.2)
88   通訳:               [聞いてるのは     ]
89   KC:   e-ever any <dis↓cussions¿> (0.2) <at toyota,>
90         [(0.7) that certain] (.) DESIGN or ENGINEERING
91   通訳: [トヨタの↑社内で:    ]
92   KC:   flaws, [(0.5) would create ↑system failures,]
```

```
93   通訳:        [特定の製造上の, 欠陥                    ]
94   KC:   [(0.3) that would result,(0.5)]
95   通訳: [あるいはその技術上の:            ]
96   KC:   [in unintended, acceleration=that was
97   通訳: [欠陥がある(inaudible)
98   KC:   my question, (0.5) [and i would APPRECIATE (0.5)
99   通訳:                    [故障して: (inaudible)
100  KC:   uh the: uhm (0.8) [COURTESY (0.6)
101  通訳:                   [繋がるような議論が:
102  KC:   [of ay direct response.]
103  通訳: [社内↑で:              ] されていますかと.
104        直接答えていただくという↑のは: [(.)] まぁ礼儀にかなった
105  豊田:                           [うん]
106  通訳: こと↑だと思いますけど=>あの<直接その質問に答えて
107        いただけますかと.=
108  豊田: =あ=
109  通訳: =そういったディスカッションがあった
110        [↑ことをご存じですかと.]
```

87-96 行目にかけて、クシニッチは豊田の非直接的な応答を、まず聞き取りのトラブルに対処するように繰り返しによって対応している (Svennevig, 2008)。87 行目でクシニッチは抜粋 1.1 の 42 行目と同様に “were there e-” と質問を開始するが、自己修復を開始し “were there any-” と発話した後さらに 2 行目で “e-ever any <dis↓cussions¿>” と修復を完了している。この自己修復を通して、クシニッチが “ever” と “any” の両方の否定極性アイテムを含む質問デザインを優先していることが分かる。98 行目で質問の繰り返しを終了させると、クシニッチは “i would APPRECIATE (0.5) uh the: uhm (0.8) [COURTESY (0.6) of ay direct response.” と音声的強調を伴って発話している。これによって豊田の発話を「直接的な応答」ではないので「礼儀にかなっておらず」「受け入れられない」という意味の対照構造が構築され (Bilmes, 2021)、トラブルを受け入れ可能性に関わるものだと示している (Svennevig, 2008)。

通訳者の順番は聞き取り困難な箇所もあったが、クシニッチが質問で選択した否定極性アイテムはここでも通訳されていないようである。101 行目と 103 行目では質問は「繋がるような議論が: 社内↑で: されていますかと.」と通訳され、抜粋 1.1 と同様に肯定的に定式化されているので、豊田の肯定的な回答との関連性はクシニッチの質問よりも強く提示されている。更に 104 行目からはクシニッチのトラブルの受け入れ可能性に関連した発話を通訳しており、前述した対照的意味構造も通訳者によって引き継がれている。クシニッチの発話順番はこの対照構造で終了しているため、通訳者は「直接その質問に答えていただけますかと.」106-107 行目で通訳した時点で順番を終える選択肢もあったはずであり、これは実際に豊田が 108 行目でそれまでに発話した受け手としての標識 (105 行目の「うん」) ではなく「あ」(108 行目) と発話し通訳者の順番が完了したと志向していることからも明らかである。しかし通訳者は間を置かずに、109 行目からクシニッチの質問内容を繰り返すことを選び「そういったディスカッションがあった↑ことをご存じですかと.」と発話を続けている。このように問いかけの通訳を順番の最後とすることで、通訳者は豊田の回答のためのスロットより強く関連付け、104-107 行で通訳されたクシニッチによる非難に関連した「否定」や「弁明」などの行動との関係性を弱く提示すると同時に、再度否

定極性アイテムを用いない質問の定式化を通じて豊田の肯定的回答を期待するスタンスを示していると言える。

抜粋 1.3 は抜粋 1.2 の直後の会話で、111 行目の豊田の回答の開始は抜粋 1.2 の通訳者による 110 行目と重なって発話されている。

抜粋 1.3

```
111 豊田: [あのこういうリコール問]題が: (.)
112        幾多にも重なるリコール問題が出たときに: (0.3)
113        え:トヨタ社内で: (0.3) え::その (.) お:意図せぬ:
114        (0.2) え:::いわゆるその: (0.3) お:加速? (0.4)
115        というのはどういう段階であるか (0.3) というのは, (0.2)
116        あの真剣に, え議論を, え致しました.
117        (1.1)
118 通訳: .hhh uh: WHENEVER uh those issues of recall um
119      came about, (0.4) uh >within< toyota, (.) uh we
120      had very serious discussion <as to:> (.) at
121      which STAGE (0.4) so called unintended
122      acceleration: (.) takes ↑place.
123      (0.2)
124 KC:  well l-let me ask a follow up question, uhm
125      mister toyoda. (0.3) have you ever been advi:ced
126      (0.2) by: your attorneys. or business associates.
127      (0.5) NOT to discuss, (0.4) any defects, (0.4)
128      an' the: elec- (.) tronic throttle control, (0.6)
129      system, (0.5) because such an admission, (0.6)
130      would create, (0.7) n-such liability, (0.5) which
131      would be financially devastating (0.2) to toyota.
((140-141 の通訳行省略))
142 豊田: >あ< そういうことは全くございません.
```

豊田は 111 行目で回答を開始し、「リコール問題が:」を「幾多にも重なるリコール問題が」と自己修復をしながらリコール問題の深刻さを上方修正した定式化を選択している。さらに「リコール問題が出たときに:」と回答を続けることで、クシニッチが質問で “ever” とした議論の時期を特定化しリコール問題の後と詳細化することで、議論があったことはリコールの対応として当然であるとする定式化が可能になっている。さらに議論の内容に関しても、クシニッチが “any” と広く設定したものに対して「お:意図せぬ: (0.2) え:::いわゆるその: (0.3) お:加速? (0.4) というのはどういう段階であるか (0.3) というのは,」と限定化が行われている。ここでは、「意図せぬ加速問題」というメディアによって広く使用された総称とともに「いわゆる」や「というのは」と発話することで、当該の問題を実際に存在し豊田やトヨタ社が認識しているものというよりも、むしろ社会や世間で議論されている事象として描写している。さらにこの総称は「お:加速?」と試行標識を伴って発話されており、豊田によるこの用語の使用に対する抵抗が示されていると言えるかもしれない。そして 116 行目では「あの真剣に, え議論を, え致しました.」と回答を行うことで、クシニッチが “any discussions” としたものは「真剣」なものであったと上方修正を伴った回答を行っている。

118 行目から通訳者の発話順番では、豊田の「幾多にも重なる」(112 行目) は “those issues”、さらに「真剣に」(116 行) は “very serious” と通訳されるなど、ここでも通訳側がある程度主体的に発話の定式化を行っていることが分かる。この通訳を介した回答はクシニッチによって 124 行目以降制裁を受けることはなく、次の質問へと移っている。

クシニッチの次の関連質問は、「弁護士やビジネスの関係者から、電気スロットルの欠陥について認めれば会社の損益に繋がるため、議論を避けるように言われたことがあるか？」というもので、ここでも否定極性アイテムの “ever” を用いて時期に関わらずそのようなやり取りがもしあれば報告することを求めている。この質問はクシニッチの質問の前置きである、経費削減のために車の安全性能を後回しにしたのではないかという批判とも繋がり得るだろう。豊田の否定は、「>あ<」という標識によってこれから続く回答が明確であることを示し、「全くございません」という極端な事例の定式化 (Pomerantz, 1986) を用いて自己弁護を正当化させている。この強い否定は、抜粋 1.1 と 1.2 で通訳者が見せた「議論をしたこと」や「したことにすること」への優先化と豊田の肯定的回答を期待する定式化での通訳、さらに豊田が抜粋 1.3 で見せた議論の時期の限定化によって議論を当然とする意味構築などと相まってより具体性を持って発せられていると言えるだろう。

次の抜粋 2.1 はバージニア州の下院議員、ジェリー・コノリー (抜粋では CN と表記) が質問を行う場面で、公聴会開始から約 1 時間 10 分が経過したあたりである。抜粋前には、コノリーが「アクセルに問題があることを最初に把握したのはいつか」と豊田に問い、豊田は「昨年末 (2009 年末) あたり」と回答した。コノリーはさらに「それよりもずっと前から顧客からの苦情があったことは認識しているか」と投げかけ、豊田は「現在は認識しているが、社長になる前は今ほどの認識はなかった」と応答している。69 行目のコノリーの “but you had SOME awareness.” という評価は豊田のこの問題の認識度合いに対して発話されたものである。

抜粋 2.1

```
69 CN: tch .hh but you had SOME awareness. (0.4)
70     um (0.8) n- we just heard from secretary lah↑ood
71     (0.8) prior to (.) your testimony. (0.4) and he
72     talked about the fact that nhtsa (1.1) sent ay team
73     to tokyo, to meet with the top leadership of toyota
74     (0.7) to bring to their attention: as forcefully as
75     they c↑ould (0.4) the FACT >that< there WAS a
76     problem, and that it needed to be attended to. (0.6)
77     that meeting was PRIOR (0.7) to your testimony just
78     now (0.4) that you only l↑earned about this problem
79     in december of last year. (1.0) uh (.) were you not
80     aware of the fact that nhtsa had sent a team to
81     tokyo headquarters?
82     (1.0)
83 通訳: あの:ニッツァが東京にチームを送ったと: そうして: (.) あの:問題に
84       関してミーテイングを行ったとさっき言われたんですけれども, (0.2)
85       そのミーティングそのもの- >ま< 今社長は 12 月ごろ [(0.3)
86 豊田:                                                   [°うん°
87 通訳: >あの< 問題を知ったとおっしゃったんですけども
88       [(0.3)    ] そういったミーティングのことも
```

89 豊田: [°うんうん°]
90 通訳: ご存じなかった (inaudible)

70-72 行目では米運輸省長官のレイ・ラフッドとの会話に触れながら、コノリーは NHTSA が急加速問題をトヨタ社に知らせるために東京訪問を行ったことに対し "nhtsa (1.1) sent ay team to tokyo, to meet with the top leadership of toyota" と描写を開始している (72-73 行)。コノリーはこの訪問の目的を描写するにあたり、まず NHTSA の訪問はトヨタ社の重役の中でもさらに上層部 (73 行目の "the top leadership") との協議を目的としていたこと、最大限の説得力 (74-75 行目の "as forcefully as they c↑ould") を持ってトヨタ社に問題を認識させようと努めたこと、意図せぬ加速問題は事実であり (75-76 行目の"the FACT >that< there WAS a problem") 憶測の段階ではないことなど、米側から見た東京訪問の真剣さを積み重ねるように上方修正しながら修辞を構築している (Bilmes, 2019)。この発言によってコノリーは "that it needed to be attended to." と訪問の目的を明確にし、NHTSA 側の訪問の妥当性を強く訴えることが可能となっている。続く 77 行目では、ここまで構築した東京訪問の妥当性を豊田の応答と対照させる意味構造が見られる。コノリーは NHTSA による東京訪問が豊田が問題を把握したと証言した「昨年末」よりも前であることを強調しながら (77 行の "PRIOR")、78-79 行目で "you only l↑earned about this problem in december of last year" と述べている。この "only" によって 12 月という時期が NHTSA の訪問時期や訪問に関する努力の意味構造と対照されることで、NHTSA の努力にもかかわらず豊田が問題を認識するのが「遅すぎる」という解釈を可能にしている。続く 79-81 行目の問い "Were you not aware of the fact that nhtsa had sent a team to tokyo headquarters?" は、78 行目で構築された「遅すぎる」という意味構造の後に配置されることによって、豊田をこの「把握の遅さ」に対して説明可能な人物として位置付けている。さらに問いは否定形を用いて定式化されている。Heritage (2002) は否定形疑問文 (例えば "Weren't you aware of the fact...?") が強く肯定形の回答を関連付けると示している。この "were you not aware of the fact...?" という定式は否定疑問文ほど強くはないが、「豊田は NHTSA による訪問を把握していたのではないか」というコノリーの認識スタンスを提示していると言えるだろう。つまりこの問いは 72-79 行で作られた修辞に関連して聞かれることによって、豊田に回答を修正する機会を与え「問題の把握が遅すぎること」や「NHTSA の問題に対する努力姿勢が伝わっていない」という含意を否定するか、もしくは修正せずに含意を認めるのかという意味構造を含んでいると言える。

しかし 83 行目からの通訳者の順番では、コノリーの構築した「遅すぎる」という含意やそれまでの修辞は提示されていないようである。通訳者はまず「あの:」という標識を用いて後続の順番構成単位が大きな質問—回答の連鎖となることを示しながら (Morita & Takagi, 2020)、「ニッツァが東京にチームを送ったと: そうして: (.) あの:問題に関してミーテイングを行ったとさっき言われたんですけれども,」と質問の前置きを通訳している。ここではコノリーが積み重ねるよう上方修正した NHTSA 側の問題に対する姿勢や努力の意味構造が下方修正され、「東京にチームを送った」そして「ミーティングを行った」というより事実的な描写が用いられている。さらに 85 行目からは自己修復の後に「今社長は 12 月ごろ (0.3) >あの< 問題を知ったとおっしゃったんですけども」と続けており、コノリーが "only" (78 行) とした時期の遅さが通訳されていない。質問は「そういったミーティングのこともご存じなかった (inaudible)」と否定形を用いて通訳されることで NHTSA の行動と対照されてはいるものの、「豊田の問題の把握が遅すぎる」

という含意はコノリーの前置きに比べて非常に弱く通訳されている。よって、豊田が「問題を知らなかったと回答を発した場合のリスクは含意は、コノリーが発話したものと同様には通訳されていないことが分かる。

91 行目以降、豊田は「トヨタ社の品質管理部門の者が NHTSA の訪問を受けたことは把握しているが、その内容や時期は把握していない」と回答し、さらに「大変申し訳ありません」と謝罪を続けている。通訳者による順番の後、コノリーは「誰がいつ急加速問題を把握していたのか、アメリカ市民を含む顧客を守るためにも明らかにする必要がある」と前置きしてから、117 行目以降は抜粋 2.1 質問内容を再度提示し豊田の回答を確認している。

抜粋 2.2

```
117 CN: we know that the c↑ompany certainly was made aware
118     (.) by u.s. officials through nhtsa (0.6) who
119     FLEW to tokyo for this express purpose (0.8) and (0.3)
120     you're telling us in your testimony you didn't know
121     about it, (0.4) you were aware of that trip, (0.4)
122     and that meeting, but you weren't aware of the fact
123     (0.6) that there was a serious acceleration problem
124     with your vehicles (0.5) until just a few months ago,
125     december of 2009. is (0.2) that correct?
```

コノリーは豊田が NHTSA の訪問について十分な認識を示さなかったことを受け、1 行目で "we know" と述べ米側の認識スタンスが極めて高いことを示しながら "the c↑ompany certainly was made aware (.) by u.s. officials" と訪問の事実性を上方修正している。さらに NHTSA は 119 行目で "FLEW to tokyo for this express purpose" と描写され、豊田が曖昧な認識を示した NHTSA のトヨタ社訪問の事実性を上方修正している。この上方修正された NHTSA の訪問が、120 行目以降では抜粋 2.1 と同様に豊田の回答と対照関係に置かれている。豊田の証言は "you didn't know about it," と描写されることで米側の高い認識状態と相容れないことが示され、さらに 121-123 行目では "you were aware of that trip, (0.4) and that meeting," と豊田の回答をさらに再定式化してから "but you weren't aware of the fact (0.6) that there was a serious acceleration problem" と続けることで NHTSA 側の訪問の目的が適切に認識されていないことを含意として示している。豊田が問題を把握した時期は "just a few months ago" と描写され、急加速問題について公聴会が開かれることになった「今現在」との時間の開きが少ないことを示唆している。このようにコノリーは豊田の回答が米側の認識と矛盾しているという含意を構築し、抜粋 2.1 と同様、125 行目の "is (0.2) that correct?" という質問によってこの含意を再生産するか問うている。次の抜粋は、この直後の通訳者の発話順番から始まっている。

抜粋 2.3

```
127  通訳: あの: >>ま<< ニッツァからわざわざ,
128        この問題に[ついて (inaudible)
129  CN:            [because (.) if it ↑is correct,
130        [(0.7)              ] given your position
131  通訳: [認識をさせるた↑めに:,] (inaudible)
132  CN:  >in the< company, and your family's association
```

```
133        >with the< company, (0.5) that would constitute
134        EXtraordinary (.) compartmentalization.
135        (1.5)
136  通訳: 12 月になるま↑では[そのアクセルの問題[はご存じ↑なかったと,
137  豊田:                  [°うん°          [°うん, うん°
138  通訳: おっしゃったわけですけどもその通りですかと=
139  豊田: =はいあのその通りでございます.
140        (1.7)
141  通訳: 12 月まで知らなかったわけですよね?
142  豊田: あのわた-私自身はです.=私自身は: (0.3) あのニッツァの方
143        と: (0.2) ミーティングがあった. (.) ということは, あの:
144        (0.2) 認識しておりますが: (0.2) その内容につい↑ては (.)
145        把握をしておりません.
146        (1.5)
147  通訳: i personally (.) know, that there was a meeting
148        (.) .h uhm with nhtsa representat↑ives, (0.2) but i
149        do not know (.) the content >of that< meeting.
150        (2.5)
151  CN:  nn okay. i- i'm just going to ask one more question.
```

通訳者の順番は重複のため聞き取りが十分ではないが、127 行目ではコノリーの質問の前置きであった “for this express purpose”という NHTSA 訪問の目的を「わざわざ」と通訳し、131 行目では「認識をさせるために」という通訳で NHTSA の訪問目的を描写している。コノリーは通訳の完了を待たずに 129 行目から再度順番を取り、134 行目までで「豊田の回答が正しければ、豊田の社内での立ち位置と家族的関係性を踏まえると極端に (社内で) 区画化されていることを意味する」と述べている。コノリーはこれを “if it ↑is correct,” から始めることで豊田の回答を未だ決定事項として受け入れていないことを示唆しながら、「極端な区画化」という否定的な解釈の選択肢を示すことで、それ以外の肯定的な意味に帰結する選択肢も可能だと暗示している。

136 行目以降、通訳者はコノリーの質問を「12 月になるま↑ではそのアクセルの問題はご存じ↑なかったと, おっしゃったわけですけどもその通りですかと」と肯定的な定式化によって通訳し、豊田の肯定的応答をより関連付ける質問デザインを行っている。これは抜粋 2.1 と同様の通訳の手続きである。139 行目で豊田はマイクを通し正式回答として「はいあのその通りでございます.」と発しているが、これは 140 行目の 1.9 秒の間が後続するのみで、通訳者は順番を取っていない。通訳を行う代わりに、通訳者は 141 行目で質問の修復を開始し、再度「12 月まで知らなかったわけですよね?」と問うことで豊田に回答の定式化を再検討させる余地を与えている (Pomerantz, 1985)。豊田は「あのわた-私自身はです.=私自身は:」と回答を修復しながら自らの 139 行目の回答に明確化が必要であると志向し、142-145 行目で応答の説明となる拡張的回答を提供することで、通訳者による修復開始を聞き取りではなく受け入れ可能性のトラブルによるものという理解を提示している。しかし、豊田は「私自身は」という発話で豊田自身とトヨタ社を区別することで、コノリーが 134 行で言及した「区画化」の意味を認め、再生産するに至っている。通訳者は 147 行目以降、豊田の発した「私自身は」を “I personally know” と通訳し 149 行目までに同じく区画化の意味を通訳している。よって、151 行目の第三位置でコノリーは “nn okay.” と豊田の回答を受け入れる発話を行うが、これは豊田の回答が納得できるものであると提示するよりも、抜粋 2.1 と 2.2 を含めコノリーが構築した NHTSA の問題に対する努力姿勢と豊

田の対応に矛盾があるという意味構造を豊田が認めたことを示す標識として用いられていると言えるだろう。

6. おわりに

この研究では2010年にトヨタ自動車が出席した米国公聴会における豊田社長の通訳者の自己及び他者修復の二事例を会話分析の視点から分析した。特に、これらの事例では通訳者が議員や豊田の発話をそのまま通訳するという役割を超え、自主性を持ち自己及び他者修復を開始していた。通訳者は言い間違いや聞き取りなどの深刻さの低い、もしくは「容易な」(Svennevig, 2008) トラブルに対処するためではなく、公聴会の場で豊田のパフォーマンスとしての回答を交渉し、もしくは引き出すことに志向し修復を開始していた。このような通訳による豊田の応答の優先化を、議員が質問の順番を通して構築する意味構造が通訳者の順番でどのように引き継がれ再生産されるのかという視点から分析した。

抜粋1.1から1.3で分析の焦点となったのは "Were there ever any discussions at toyota..." と定式化された複数回にわたるクシニッチ議員の質問である。議員が用いた否定極性アイテムの "ever" や "any" が通訳されず「議論をなさったことはおありですか？」と定式化されることで、質問は議員が示す否定的なスタンスよりも、通訳者が議論の存在を肯定するスタンスをより強く提示していた。さらにこの定式化は「議論をしたということにしておきますか」と自己修復され、豊田の議論があったことを優先化する質問が選ばれていた。その後豊田は議論の時期をリコール問題後と特定化し応答することで、議論をあったことを当然とする回答が可能になり、クシニッチが提示した「トヨタ社は議論を避けたのではないか」という疑念を否定する結果となった。

抜粋2.1から2.3では豊田がNHTSAのトヨタ社訪問の詳細について「知らなかった」と回答したことについてコノリー議員が複数回確認を行う場面を対象とした。コノリーは豊田のこの回答をNHTSAのリコール問題に対する努力的姿勢と対照させることでトヨタ社に対する否定的な意味構造が構築されることを暗示し豊田に回答を修正させる機会を提供した。しかしこの対照的な意味構造は通訳者の順番では下方修正した状態で定式化され、豊田が「知らなかった」と回答し続けることへの否定的意味も強く通訳はされなかった。結果として、豊田のこの回答に後続して「12月まで知らなかったわけですよね?」という他者修復が通訳者自身によって行われたが、豊田はこの回答を肯定するに留まり否定的意味構造を再生産する結果となった。

この通訳者による通訳の役割を超えた自己・他者修復の二事例は、通訳者自らが豊田が発話する特定の回答に対する肯定的もしくは否定的スタンスを提示するものであるという共通項が挙げられる。このスタンスは肯定的な語彙選択や自己修復 (抜粋1) に加え他者修復を開始すること (抜粋2) によって提示されていた。中には「議論をしたということにしておきますか?」という極めて明示的な肯定的スタンスの伝え方も見られた。しかしながら抜粋2.1から抜粋2.2では議員の発話した対照構造が明確に通訳されず、その流れで行われた通訳者の他者修復の開始は否定的意味構造を発話するリスクを比較的弱く提示してしまっていた。このことから、通訳者が通訳の役割を超え特定の回答の選択肢への肯定的もしくは否定的志向を示す場合には、それまでの連鎖内で生産された意味構造がいかに通訳者の順番を通して引継がれているのか、ということが答弁者が通訳者の志向を拾い、応答に繋げる際には重要であると言えよう。

しかしこのような踏み込んだ通訳の中でも見られなかったのは「なぜ特定の定式化が優先される (されない) べきなのか」という通訳者による説明だろう。本研究の二事例では考察に限界が

あるものの、通訳者が理由を添えて修復を行わなかったことに関して以下の考察を発展させたい。まず、通訳者は自らの修復の選択肢が優先されるべき理由を添える場合、通訳を超えた提案という行為を行いそれをさらに正当化していると言える。また、その提案は豊田側に承諾・拒否の行為を関連付けることで (豊田はその関連付けに志向しないこともできるが)、議員と豊田の質疑応答の連鎖から逸脱してしまう可能性がある。通訳者は理由付けという行為を行わないことによって、あくまで議員の発する英語に対しての認識スタンスが高いのであり、答弁の意思決定を左右する役割には踏み込まない姿勢を取っていると言えるだろう。また、提案―承諾・拒否の連鎖に従事しないことによって、公聴会の場での適切な応答とは何かを既に共有した者同士の相互行為を体現しているとも捉えられるかもしれない。

今後の研究では、公聴会場面での通訳の役割を超えた行為について更に事例を検討し、修復以外の行為ではどのようにそれが成されているのか、また通訳の役割を超えることによって通訳者は何に志向し、その結果回答者にどのような応答を関連付けることが可能となるのかを明らかにすることが望まれる。

参考文献

Bilmes, J. (2019). Regrading as a conversational practice. *Journal of Pragmatics*, *150*, 80–91.

Bilmes, J. (2021). Organizing talk with contrasts: Nixon and Colson discuss watergate. *Journal of Pragmatics*, *175*, 1–13.

Heritage, J. (2002). The limits of questioning: negative interrogatives and hostile question content. *Journal of Pragmatics*, *34*(10–11), 1427–1446.

Heritage, J. (2009). Questioning in Medicine. In *Why Do You Ask?* (pp. 42–68). Oxford University Press.

Li, R., Liu, K., & Cheung, A. K. F. (2023). Interpreter visibility in press conferences: A multimodal conversation analysis of speaker–interpreter interactions. *Humanities & Social Sciences Communications*, *10*(454), 1–12.

Liu, R.-Y. (2023). Interpreters as spin doctors: The interactional role of interpreters in China's political Press Conferences. *The International Journal of Press/Politics*, *30*(1), 423–444.

Morita, E., & Takagi, T. (2020). Interjectional use of demonstratives: Anoo and sonoo as resources for interaction in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics*, *169*, 120–135.

Okada, Y. (2013). Prioritization: A formulation practice and its relevance for interaction in teaching and testing contexts. In T. Greer, D. Tatsuki, & C. Roever (Eds.), *Pragmatics and language learning* (Vol. 13, pp. 55–77). University of Hawai'i, National Foreign Language Resource Center.

Pomerantz, A. (1985). Pursuing a response. In J. M. Atkinson (Ed.), *Structures of Social Action* (pp. 152–164). Cambridge University Press.

Pomerantz, A. (1986). Extreme Case formulations: A way of iegitimizing claims. *Human Studies*, *9*, 219–229.

Svennevig, J. (2008). Trying the easiest solution first in other-initiation of repair. *Journal of Pragmatics*, *40*(2), 333–348.

謝辞

本研究は 2023 年度放送文化基金助成 (人文社会・文化)「米公聴会とそのニュース報道の談話分析による事実検証手法の考察」を受けて行われた。